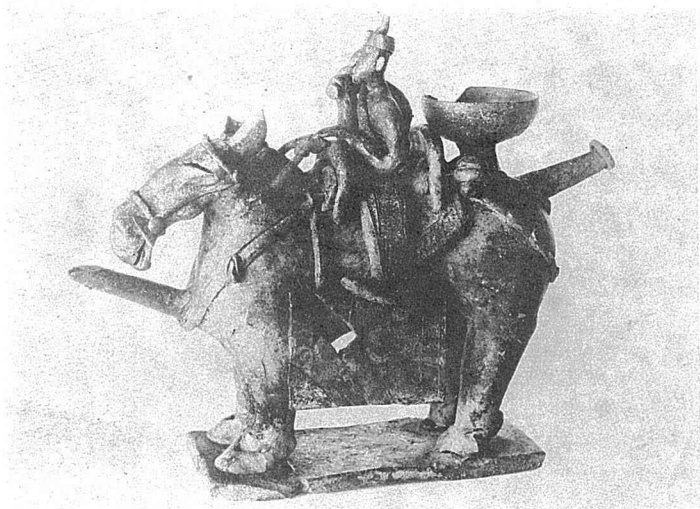


朝鮮慶州路東里西古墳發見陶質器二種



生に民衆運動、排日の解剖、婦人問題に其運動、支那の主義者總まくり、現支那の文學、支那思想界近狀、現支那の教育事情、支那基督教批判、に分る各項興味ある記載に富み筆を歐化に其の反動に起し思想界の近狀には丁文江、張君勵、梁漱溟、胡適、吳稚暉、陳獨秀の態度を叙するが如き、其の記載が頻々として我が新聞紙に現はるる割合に概觀的の知見を缺ける我が邦人の支那現狀に對する智識の缺陷を補ふには有益なる良著を謂ふべし。
(大阪屋號書店、四六版四百頁、價二圓五十錢)

●支那文化史講話

文學士 高桑駒吉著

東洋史學界の耆宿たる著者が從來の東洋史書の執筆法を變へて主として所謂文化史を中心として支那五千年の歴史を叙したるものなり、周以前、周代、兩漢及三國、兩晉南北朝、唐代、宋代、元代、明代、清代の九章に分ち各章に歴史概説を題して其の時代の王朝興亡史を概説して前出し、而して後に文化史一般として諸制度、法律諸科學、文藝、美術、工藝、音樂、風俗、習慣、思潮、

衣食住、農工商業等につき興味津津たる記述をなせり。
(東京本郷區西片町共立社發行、菊版五百三十頁、價四圓三十錢)【那波】

彙報

●口繪解説

本號の口繪として收められた二つの陶質器は昨年の五月から六月に互つて朝鮮總督府古蹟調査員の學術調査を行つた慶州路東里西塚の發見品である。該發掘が考古學上に種々貴重な研究資料を齎したことは前號彙報欄に紹介したところであるが、此の陶質器の如きはまさに其の尤なるもの、一に數へらる可きもので、從來南朝鮮に於いては殆んど類例を見なかつた珍しい器形を示してゐる、即ち上の一は騎馬の人物像で、薄い臺板の上に太つた馬の形を造りつけ、これに鞍其他の馬具をしつらへ、別に作つた一個の人物を乗せたもの、其の馬につけた置き鞍をはじめ鈴、杏葉、雲珠等の馬具の着裝狀態を精確に表

はした點は内地の埴輪等より遙かに優り、人物像また頭部に一種の被り物を着け、左手に手綱を握り、右手を舉げて槌様の器を持つた姿躰が面白く出来てゐる。下の方は舟の形を象つたもの透しのある器蓋の上に造り附けられて舳先が特色ある形を呈し前後の兩端側には飾りがあり、艦には船を漕ぐ人物を現はしてある。そして此の人物は舌を出してゐるのみならず、更に大きな陽物を露出している。杯如何にもグロテスクの趣味を帯びてゐる。一體に古拙のナイーヴな手法に出でてゐて、朝鮮固有の技術に屬し、何等支那の影響を受けてゐないものなることは言ふまでもない。

兩者共に高さ六七寸の間にある小形のものであつて一見支那に廣く行はれた漢唐の明器なごに類似を見る様であるが、寧ろ之は關係なく特殊の發達をした玩具若しくは意匠形土器(Imagery-form vase)とす可く、日本の飾附陶質容器等と比較す可きものであらう。即ち細部を檢するに前者の如きは馬の胴部が空虚で、これに通すべく人物の背後に圓形の坏が造り附けてあり、また別に前に細長

い注ぎ口を突出してゐて、前者より水を注ぐに、後者から流れ出て、一種の水容器をなしたことが知られる。後者また物を盛る基に役立つこと勿論である。この點に於いては支那三代の銅器に見る動物や鳥の形をした尊なごに似た處がある。二者がこれを藏した遺跡と其の副葬品とから推して新羅統一以前の製作に屬することほゞ誤りが無いから、如上の特別の器形を作り出した當代人の心理を推究し、またこれを類似の遺品と比較してその系統を尋ねることは甚だ興味多いわけである。なほ如上馬具其他の着裝狀態が當代の習俗を反映するものとして古新羅の風俗を尋ねる上に寄與することは、こゝに改めて説くまでもなからう。ちなみに云ふ。同古墳發見の此の種陶質器は騎馬人物像船形にもなほ一個宛あつて、形の上に若干の相違がある。其等に就いては他日朝鮮總督府から發行さるべき該古墳の調査報告に詳記するであらう。

【梅原】

● 東洋文庫の開館

前中華民國總統府顧問 George Ernest Morrison 氏が、西

紀一八九七年ロンドン・タイムズの通信員として北京に着任以來、一九一七年（大正六年）夏に至る迄約二十年間苦心經營して收儲したる Morrison Library は、支那を中心とせる極東諸邦に關する歐文々獻の一大蒐集なるが東洋文庫沿革略に據れば、大正六年男爵岩崎久彌氏は其の圖書大小約二萬四千冊地圖・版畫合せて約一千枚を三萬五千磅を以て同氏より購入せられ、爾來更に範圍を擴張し新に歐文圖書約二萬五千冊漢籍約二萬冊を購入し、東京本郷に地を卜して新に文庫を建設せられ、昨年十一月その敷地建物圖書設備一切を舉げて之を財團法人東洋文庫に寄附せらる。於斯、同文庫はその成立披露のため昨年十一月廿九日兩日に亘り關係ある學者實業家等を招待して所藏圖書の一部を展觀に供せり。陳列圖書はこれを四部に分ち、第一部には本館の最も誇とする一四八五年 Antwerp 版 Marco Polo 東方紀行を始め以下十七世紀に至るその諸版本十一種並びに參考版本を收め、第二部には西人の日本に關する著書の中、一六一四年（慶長十九年）Tahoa 刊 Mendez Ptoine 極東遊記以下葡萄牙人渡

來以來幕末に至る間に出でたる重要なもの三十餘部を示し、第三部には支那に關する歐人の著書中、一五八五年（萬曆十三年）Ramus 刊 Mendoga 支那大帝國史以下四十三種を陳列し、以て明末清初に於ける耶穌教會宣教師の業績を主とし、十八世紀末に於ける近代支那學の鼻祖たる學者の論著數種を交へて陳列し、第四部には亞細亞に關する西籍の中、一八六〇年 La Hage 刊 Tjibetan 伯韓日本回想記附圖以下近代の述作に係る大著四十七種を陳列せり。かくて日本を始め泰西に紹介し、且又支那に關する稍詳密なる知見を最初に西方に傳へたる Marco Polo の死後、宛も本年が六百年に相當するに因み、その重要な紀行を第一部に陳列し、第二部の日本に關する古書、第三部の支那に關するそれと相俟ちて西歐に於ける日本學及び支那學の源流を瞥見するに資し、第四部は展觀の間自ら西人が亞細亞の各方面に對して研究の歩を進めつゝある事實を看取せしむるに意を用ゐたり。尙此際別に岩崎男爵はその舊來蒐集したる圖書の一部なる古寫本八種及び名家自筆稿本八種、正平版論語以下古刊本三十九種

その他雜三種をも展觀に供せられたり。

願れば七年前の秋深川岩崎別邸内の倉庫にて荷造のま
ま浸水の災に遭ひ辛うじて救助せられたる Morrison Library
は昨年の秋またも大震災大火災に見舞はれしが漸くその
厄を免れ、今や更にその内容の充實を得て爰に東洋文庫
の開館を見るに至りしは吾人斯界のため慶賀に堪へざる
ところなり。【杉本】

●萬國布教博覽會出品物展觀

京都帝國大學にては羅馬法王廳主催の萬國布教博覽會
に出陳すべき基督教關係遺物寫眞等數十點を昨年十月四
日午後同大學本部樓上に於て大學關係者史學研究會員等
に展觀せしめたり。其の品目左の如し。

羅馬博覽會出品物目錄

一、東藤次郎氏所藏品

- シヤビエル聖人畫像、マリヤ十五支義圖、銅版天
- 使讚仰圖、耶蘇磔刑像、前背、同入銅筒、蒔繪茶碗
- 蓋及側面、メダル其他小遺物、吉利支丹抄物外裝、
- 吉利支丹抄物内容、同寫眞本、天使圖斷片、

二、大神金十郎氏所藏品

耶蘇磔刑像入厨子、同像、銅版畫、メダル珠數等

三、中谷繁藏氏及中谷源之助氏所藏品

メダル珠數等、ギアムベカドル、ドチリナキリシ
タン、基督像マリア像厨子、基督像、ロレッツタマ
リヤ像

四、吉利支丹墓碑類

高槻千提寺所在墓碑並拓本、同高雲寺所在墓碑並
拓本、京都延命寺發見墓碑並拓本、成願寺發見墓
碑並拓本、等持院道發見墓碑、慶淨光寺發見墓碑
並拓本、西寺址附近發見墓碑並拓本、椿寺發見墓
碑、東寺附近發見墓碑並拓本、

五、吉利支丹名字入鞍

六、京都帝國大學文學部考古學研究報告第七冊

七、京都附近地圖

八、京坂附近地圖

●史學研究會

例會 昨年十月四日午後一時より法學部第三教室にて開

催左の講演あり來會者四十餘名午後五時散會せり。

永樂大典考

文學士 神田喜一郎君

永樂大典が永樂元年七月翰林學士解紳に敕して編纂せられ文献大成の名を附せられて後更に姚廣孝、劉季篪、解紳の三人に勅命あり、一百六十九人の人手を煩はして改纂をなし、同五年十一月に完成し名も永樂大典と命ぜられし迄の經緯の詳細を姜紹書の韻石齋筆談、朱國幀の湧幢小品、沈德符の野獲篇、劉若愚の酌中志、繆荃孫の藝風堂文集等の記載に據りて詳述し、趙友同の存軒集、同弘祖の古今書刻に永樂大典公刊の記載あることを批判し、嘉靖時代に二副本の成り宮中の文淵閣、皇史宬に之を藏し、原本の南京翰林院に移藏せられたることを、尙四庫全書の編纂に際し永樂大典より三百六十五種の逸書を得たることを述べらる。

清教徒革命と歴史家

文學士 中村善太郎君

英國人に對する清教徒革命は吾々に對する徳川時代の末期又は維新初年の事件の如く、各々最負々々があつて各自の立場から是非を論ずることは現在も餘り變りはな

い。當時現はれたパンフレットも多數大英博物館に藏せられてるが貴重な史料であると共に取捨に惑はざるを得

ぬ。歴史家も亦各都合のよい史料に據つて議論を構へる傾向があり、従つて公平な觀察は寧ろ外國人の手に成つたものに見ることが出来る。さてギゾー、ランケ其他諸家の論説を紹介され、特にギゾーの英佛革命の比較並に其の相互の關係所論、及ランケの歐羅巴史的に考察した公平適切な英國革命觀を詳細に説明され、更にガーデナーの著作に就いて批評を試みられた。ガーデナーはクロムウエルの血統をひいてるから黨派的偏見に陥り易い筈であるが割合に公平である、加ふるに彼は以上の諸史家に較べて豊富な資料を使用した長所を有する。しかし彼は其の資料を巧に利用しかねた憾みがあつて折角新しい史實を提供しながら從來の史家の偏見を其儘踏襲した陥がある。また饒多な史實に混惑して前後矛盾した記載も少くない。即ち彼はある問題に就いて材料を取り揃へる、を先それだけで議論をまごめる、次いで現はれる材料は措いて顧みない従つて年代的に記されてるが首尾一

貫を闕く、これは史學研究法の上から熟慮を要する點であると思ふ。云云。

大會 十一月九日午後一時より文學部第七教室に於て、開催先づ會計庶務擔任羽田博士より諸般の事務報告あり會計島田貞彦君會計狀態を報告して左の講演に入る。

語原の研究と史學 文學博士 新村 出君

新井白石が東雅の總論に「我國古今の言に相通じなむには、まづ其世を論すべき事也」と言ひ、又我國古今の言に相通ぜむ、音韻の學によらずして、また他に求むべしとも思はれず」と言つたのは、其後、十九世紀の初期から興つた歐洲の比較言語學にて言ふ所のものご一致する所が有る。一の民族と他の民族との個々の言葉を探へて單に其れが類似してゐるごの理由で兩民族が根元を同くするご説くは頗る危険な事であつて、是非ごも其れ等の言葉の語原を究めた上で立論せなければならぬ。語原の研究上最も有力なる援助を受けるのは史學である。先づ個々の言葉の出典、即ち何時如何なるものに其れが見えてゐるかを調べ、然る後、其の言葉は何所を通じて傳

來したかごいふ経路、及び其の途中の言葉に同一のもの有りや否やを研究せねばならぬ。一の言葉が有れば其れを其の民族の語原で説明し得るか否かを歴史にて遡り得る所まで調べて、其れか外來語であるか否かを知るのであるごて其の *home* (應) *his* (亞麻) に就いて例示せられ次に *lapary* (掛氈) といふ語の語原を我國の「たへ」支那の *タフ* と比較せられ、此の語は希臘語にも語脈を引いてゐるが、他方には其れがベルシヤから支那日本へご傳はつて來たものご推定せられる。又トタンといふ語は根本はベルシヤ語であつて、ベルシヤより葡萄牙西班牙に傳はり、其れが或はポルトガル人の渡來以前に支那より日本に傳はつたものであらう。是等を以て見れば、日本支那ベルシヤ三國の文化關係に何等かのサゼツスチョンを得るであらうご述べられた。

正倉院に就て

關 保之助君

正倉院は消耗品を納める動倉に對し、永く保存する物品を納める倉の稱で、元は宣衛、諸國、諸寺にも有つたが、今日まで残つてゐるものは東大寺のそれのみである

之は双倉又は三つ倉とも稱せられ、最初木材の許す限り南北に二倉を造り、然る後に之を連結したものである。

此倉の創立年代は不明であつて、大佛建立以前から存在して居つたものであるが、聖武天皇崩御後、四十九日に御遺物を東大寺に寄進せられたので、北の中央の倉に之を納めて勅封し爲し、南倉には東大寺の什物を藏して居つた。其後内容に變遷あり、明治初年に三倉共に皇室へ返上した。之れより全部勅封し成つたのである。さて其の内容なる御物に就いて説明し、拜觀者に對する注意を述べられた。

右終つて評議員の改選を行ひ、次で左の講演に移る。

柳澤吉保の一面 文學博士 辻 善之助君

柳澤吉保は田沼意次と共に近世に於ける奸臣と言はれ元祿時代の悪政、就中、貨幣の改鑄と生類憐みに對する責任を一身に負はされて種々悪評を受けてゐるが其れは誤傳から來たものが少くない。新井白石は『折たく柴の記』に貨幣改鑄の事を批評してゐるが、元祿八年の改鑄の時は吉保は一小納戸役に過ぎずして責任ある地位

ではなかつた。寶永の改鑄には多少の責任は有るが、白石が此の兩度の改鑄を一緒にして批評してゐるのは誤つてゐる。生類憐みの事は綱吉の意中から出たものと思はれるので、吉保に責任を歸するのは酷である。吉保は唯だ將軍の意嚮を奉ずるに忠實であつたのみである。其れに就いて彼の人物を禪學修養の方面から觀察して見やうとて、吉保が廿歳の時龍興寺の竺道に參禪したのを初めとして、洞天、普濟、高泉、雲巖、千泉等に就いて禪を學び、造詣は可なり深く、又詩文の嗜みも有つたけれども、極めてお大名式のものであつた事を説かれ、要するに吉保は奸佞なる邪臣では無く、さりとて大手腕があつて國家の重きに任ずる政治家でもなく、謹直正實なる人物で、一意將軍の意嚮に合はんと努めた者である。

併しながら必しも常に將軍の意に迎合したもので無く、時には直諫した事も有つて、而もそれが用ひられなければ飽くまでも諫めるこいふ風であつたこと述べられた。猶ほ會場には黄檗山萬福寺所藏の柳澤吉保悅峯筆談、吉保悅山問答、同眞光院所藏の吉保書狀、萩生徂徠

書狀、平手定該等七名書狀を陳列して觀覽に供した。

六時講演終つて後席を大學本部階上に移して晚餐會を催した本會の爲め態東京より來會せられた辻博士を始めとして藤井維新史料編纂官、各地高等學校歴史科擔任教官等も多く出席せられ、食後交々起つて各有益なる史學上の所見を吐露せられたから、一同頗る愉快に一夕の交驩を爲すことが出來た。

評議員改選の結果、石橋五郎、羽田亨、濱田排作、西田直二郎、小川琢治、内藤虎次郎、桑原隲藏、矢野仁一、坂口昂、三浦周行の諸氏新に就任せられる事となつた。

● 讀 史 會

例會 昨年九月二十六日午後六時半より學生集會場に於て開催、參會者、三浦教授、中村講師其他拾七名左記講演ありて十時散會。

葛川明王院文書に就て 文學士 中村直勝君

近江滋賀郡葛川明王院の位置、縁起、沿革及無動寺との關係より其の古文書に及び最も古きものとしては仁平元年より鎌倉時代に及ぶものあり、多くは伊香立ミ葛川ミ

の土地境界爭議ミ炭焼竈に關する訴訟文書なり。古文書に關聯して吾人の興味をひくものは女性の手蹟になる紙背文書のある經文の殘存せることにして殊に法華經斷片の法便品の裏には七通の書面あり、何れも發信人の部分は截取られ不明なるも受信人は「さぬき」「鶴安」など、認められその斷簡の文意より推察するに蓋し女房、稚兒共の手交せし書翰ならん。次に明王院に遺されたものとして見るべきは足利直義、義尙、日野富子等の自筆の參籠札にして外に元弘、貞治年間の古きものもあり、明王院は僻陬の一寒村に在る古刹なるが金石文、古文書、建築等に見るべきもの多し云々。

攝關家の文書に就て 文學士 松野遵崇君

攝關家には勸學院政所ミ攝關家政所ミありてその事務管掌の分野自ら定り前者は南都に關する事務、後者はそれ以外の事務を分掌せることより政所下文ミ長者宣ミに就て各方面より系統的に分類し前者は公的性質を有しその發する場合は比較的重大なる事或は永續的事柄にして、後者は私的性質を帶び形式簡單なるを以て發する場

合多しと述べ更に兩者の様式論に入り轉じて下文と符との異同を指摘して結ばる。

例會 十月二十日午後六時半より學生集會場にて開催、
參會者三浦教授其他拾五名左記講演ありて十時散會。

下野國を旅行して 橋川 正君

狗奴國即ち兩毛地方は房國にも古代に於ける東國文化の中心地帯にしてその文化たるや佛教的色彩濃く特に藥師寺戒壇と相對立し佛教文化の一中心をなしたり、後此地方より圓仁、圓澄の如き高僧知識の出生を見たるも由縁なしとせずいふことより大谷及佐貫の石佛視察談に移り就中佐貫は親鸞に縁故深き地にして覺加の口傳抄に傳へらるる惠信尼夢想の中に見ゆる地名なるも此地方は弘法大師の信仰篤きにより親鸞との關係は忘れられたりといひ、最後に足利學校に就て現状及能化九窩と北條氏政との挿話を述べて結ばる。

再び大日本史編纂に就て 三浦周行君

大日本史の編纂は、大義名分を闕却せんとしたる釋儒二道の隆盛の反動として内尊外卑の傾向を有する學風の

盛んになれる近世文藝復興期に於ける時代的要求の所産なりと前提され、大日本史と本朝通鑑との比較論に移りてその異同と類似點を指示され大日本史編纂の資料蒐集の多方面に互れる事と、その難事業なりし事情を往復書案、水戸史館雜事記兩京日記等によりてその例證を提示せられ、當時歴史の編纂研究に於ける史料精選の現象も近世史家の上に見る一傾向にして光圀の如きは一一蒐集せる史料の檢閲を行ひたり、又史官採用の方法としては才能を標準となしその位置、階級、學派、年齢國籍の如何は敢て問はずしてこれを拔擢し齡而立に満たずして編纂總裁に擧用されたる者一二を以て數ふべからずとて推挽擢用の行れたる事實を例示せられ斯くて上下協力一定の方針の下に二百年の歳月を費して一大史編を完成せしが如きは洋の東西を問はず古今未會有のこゝなりと結ばる。

例會 十一月十四日午後六時半より學生集會場にて例會を開く會する者三浦西田兩教授中村講師其他二十名、偶京都へ出張中の維新史料編纂官藤井甚太郎氏及び工學

部天沼教授の左の講演あり十時散會。

一、維新後の社會状態の一二に付て

文學士 藤井甚太郎君

維新直後の社會問題として最も識者の頭を悩したるは第一に大變革後に於ける我社會整理の標準にして春嶽公の丁卯日記に平安朝の王政も不可西洋流も亦不可先の目途も立たぬ旨を告白せられし如く、實際當時の智識を以てしては解決困難なりしなり、元來維新の志士は建武中興位を理想せしものなりしが此の間にありて神武創業の理想を鼓吹せし思想家を津和野藩の大國隆正とす北畠准后も單に延喜天曆を理想とし神武復古を知らざりし故其事業は失敗に歸せりて神武創業の宏謨を説く大國系統の國學者は福山姫路小野等の中國筋に多く岩倉具視の識見は玉松操より來れり云はるゝも實は亦大國系統なり、次に問題となりしは公議の論とす慶喜の大政奉還の上書にも爾後公議に依らる可き旨を載す、公議論者は横井、由利、坂本、後藤、福岡の外に上田藩の赤松、幕臣大鳥、大久保等ありて文久より明治に及ぶ遂に成文とな

りしが五條の御誓文なり、公議の意味はも諸侯會議の趣旨なりしが木戸孝允等は其の支那の霸王の會に似たるを以て非なりとし天皇神に誓ひ給ふの形式に改めたり御誓文の案は由利、福岡二案の外此の中間に位す可きもの最近津和野の龜井家史料中より發見せられたり。次に元年より三年頃に盛に論議せられしは封建論と郡縣論となり時の新智識にして制度寮撰修たりし森金之丞(有禮)の建議あり今治、宇都宮、中津、久留米諸藩の上書あり山階宮の國憲制定論ありて遂に廢藩置縣に至りしなり、次には官制問題と官吏登用問題となり官制は創業の際にて變革頗る多きが畢竟西洋流の三權分立の精神採用せらる但草創時代の常として實力ある者は他の職權を侵して其の力を延すの傾ありき、官吏の登用に付ては初め各藩より徵士を召して朝廷直參と爲せしが之に付ては鳥尾小彌太氏の國勢因果論中にもいへる如く朝廷よりは藩の密偵と見られ出身藩の門閥家よりは藩を賣る者と目せられて頗る苦しき立場に陥れり茲に今日より見て意外とすべきは官吏入札の實行なり、官吏公選の詔勅發せられ明治二

五、十三、實行せられ議定六官知事は公卿大名中より選舉せらるゝの定めなり然れどもこれにはさすがに非難多く大村益次郎は共和政體の基なりとて最も強くこれに反對し入札は只一回にて廢止せらる此の官吏入札は當時一般に在りし如く米國にては大統領をも選舉する由なればなご、いふ簡單なる考にて各方面にて行はれしもの、如し佐嘉藩内にては名主の入札迄ありき之等に付ては京都府書類中に在る建白留、又は馬場文英の維新前後等に見ゆ、次には不正規兵の解散と士族の處置となり、維新の際各地に農兵其他の不正規軍隊組織せらる維新後之を解散するの容易の業に非ざるは現今の支那裁兵問題に徴して知る可し而も各地多くは僅少の一時金にて解散せられたり只多少紛擾を惹起し犠牲を見たるは山口の奇兵隊騷動位のものにして案外平靜裡に解決を見たるは天皇の稜威國體の然らしむる所といふの外なし、士族の處置も亦大問題なりきこれは一、身分上の處置、二、生活上の處置、三、精神上の處置に細分するを得、身分上に就ては明治二年より五年迄三回の變革を経て遂に諸侯の一門よ

り下士に至る迄を一様に之を士族とし其間の差別を全廢して解決せり、生活上の處置に就ては靜岡に轉封を命ぜられし徳川宗家の如き最も此問題に苦みたりしが一般に其歸農歸商を許可せり元來幕末は諸藩共財政紊亂し藩士の生活問題に焦慮せしが天保頃迄に改革を終りしは大抵成功せしも其後に至りて改革に着手せし藩は天下多事に際會して皆失敗に了れり長藩の如きは天保中村田清風の改革に依りて最も或功せしものなり、かくて明治二年三年の頃は各藩共家祿の整理に忙しく又開墾事業流行せり士族の手にて行はれし開墾地の有名なるは莊内の松ヶ岡筑前の大休山等なり之等の開墾團體は政府よりは不平士族の陰謀團とも見られしものなるが多少其形跡無きにも非ざりき、爾後明治十年頃迄士族の授産は社會問題の最大なるものにして士族の商社各地に出現し政府亦之に對して養蠶製糸を獎勵せり此の如く士族の資本勞力が産業に注入せらるゝの形勢は遂に貴族の資本家化商工化となり六年の日本鐵道會社設立十年の十五銀行創立の如きは其具體化の顯著なるものなり、次に士族の精神上の處

置ミしては五年の廢刀令あり是より先き明治二年已に森金之丞の建議せ 所にして神風連の騒動は在りしも大體に於て廢刀令の効果は著しきものありしなり。此他尙貧民救濟問題あり穢多非人の稱呼廢止あり要するに新舊思想の衝突は此の頃一般の時勢粧にしてこれが犠牲者ミしては大村益次郎、横井小楠を推すべし中にも小楠暗殺者の口實ミする所は彼の天道覺明論に於ける國體侮辱思想に對する反感にしてこれが爲め下手人處刑の際には有力なる助命論者ありし程なり尙教化問題ミしては排佛毀釋あり孟子を教科書ミするの可否論あり漢學者ミ皇學者ミの衝突ありて問題頻出せり、最後に一般經濟問題ミしては二年より三年に互り紙幣の大暴落あり平民の恐慌甚しく岩鼻縣を初めミして各地の農民暴動も其主因は此問題に在りき云々、

一、二三の古建築に就て

工學博士 天沼俊一君

一、古建築の意義古社寺保存法に依りて特別保護建造物ミ指定せられたるものをいふ、現今約八百あり内神社

建築約二百五十あり平安後期の宇治上神社本殿を最古ミし明治八年の嚴島神社大鳥居を最新ミす寺院建築は約四百五十あり推古の法隆寺堂塔を最古ミし元祿寶永の東大寺大佛殿を最新ミす。

二、時代別大別して佛教渡來の前ミ後ミし後を更に八時代に細分す、飛鳥、奈良(前期白鳳、後期天平)平安(前期弘仁、後期藤原)鎌倉、室町、桃山、江戸、明治はれなり。

三、木造建築の特質我國古建築は木造にして其特質は拱式にあらずして楣式なることあり彈方に富むを以て石造煉瓦造よりは遙に耐震的なり鎌倉前の曲線は圓に非ざる二次曲線なるも鎌倉後は圓弧加はる。

四、外國建築との比較及び其影響柱の膨み(エンタシス)は古典建築の影響にして西域支那朝鮮を経て來る、裝飾文様の龍膽唐草も外國の影響也、回教建築は支那南洋に及べるも日本には無しミ從來一般に考へられしが其の花頭拱の影響は多少之を見るが如くにも考へらる。

五、實例法隆寺堂塔は支那南北朝の様式を木造にて傳

へたり。榮山寺の八角圓堂は天平時代なるも直接外國樣式の模倣を認めず、非凡の意匠を示す。高野の瑜祇塔大塔は高野山獨特の單層塔なるも今は無し僅に根來寺に於て其佛を見る、密教と共に支那より傳はる、印度の影響をみることを得。圓覺寺の舍利殿、鹿苑寺の金閣、本派本願寺の飛雲閣は何れも花頭窓を有す余はこれを以て現今土耳其西班牙に於て多く見るを得る回教建築の影響として考ふるものなり云々。

大會 十二月十四日正午より大學々生集會場講堂に開き左記四氏の講演の他日鮮併合十五年に因み主として京都帝國大學所藏の朝鮮文書數十點を陳列して展觀に供せしに會衆三百余名頗る盛況を呈せり終つて席を階下に移して晚饗を催し十時散會せり。

一、南北朝時代に於ける出版事業

文學士 中村直勝君

我國の出版事業は奈良朝に萌芽し平安朝を経て鎌倉時代に至りては京都の外鎌倉奈良高野山に起りしが何れも佛典を主とせり南北朝に入りては正中元年僧玄惠が出版

せし詩文集あり次に五山版起るこれは宋元の出版事業の模倣にして從來趣を異にし禪僧の語録多きも經史詩文に關するもの亦少からず、五山版が宋元の風を帶びたるは僧侶の求法の爲め渡支し歸來せし者多きが故なるは勿論なるも亦版工の江南地方より來朝せし者少からざりしにも依る、次には堺の正平版論語あり鎌倉時代已に秋田城介泰盛が高野に於ける大日經義疏の出版を助けし事ありしが南北朝に至りても曆應二年高師直は多殺の罪を償はん爲めに首楞嚴經義疏を出版し尊氏亦大般若經六百卷の出版を企て勸進に應ずる武士多かりき(原本を供覽す)要するに南北朝時代の出版事業は敢て盛大なりしこいふにあらざるも(一)古來佛恩報謝の爲め寫經は大善根とせられしが平安末源平の頃には信仰よりも勢力家の遊戯視せられ聊行き詰りの感ありしに茲に一轉機を生じて印刷の流行せること(二)淨土教の弘布に伴ひ多數の觀念發達せしこと(三)勸進が行はれ多數の人より零細の資金を集め各其の善根功德に干與するを得るに至りしこと(四)武士が滅罪の爲めに善根を作すこと流行せしこと(五)文化

の民衆化民衆の貴族化より、割合に手に入れ易き出版事業の行はれしこと(六)最後に宋元との交通に依る出版事業の刺戟ありしことは注意すべし云々。

一、室町時代洛中の商業

文學士 魚澄惣五郎君

室町時代に座の發達あり經濟史上重要な地位を占むるも既に三浦博士の研究あればこゝにては重に狂言及謠曲に現はれたる所を述べん、此の時代の初め既に大體京都は上下京に分れ上京は内裏幕府武士學者藝術家の住宅地たりしより高級の織物裝束類の商人あり下京には下賤の町人の住地なりしより商品も亦劣れるが中間の三條四條五條は最も繁華にして諸國の商人貨物輻輳し河東の北部の最も多數の信仰を集めたる社寺を中心に商業殷賑なり狂言により賣買契約締結の際代物(代金)は三條の何々屋にて渡しませうと云へるを以て見るに地方に末寺多き有方の寺院又は三條邊の大なる旅館にては爲替業務を営みし如し市場も時々開かれ期間中奉行所より高札を立て、地域を指定す牛馬市のこみなぎも狂言に見ゆ人身の掠奪

賣買も亦行はれ雲居寺の邊にて女の子が人買に買はれしここと見の當時土倉酒屋は共に金融業者として収益確實にして富豪多く經濟生活の中心機關たりしものなるが狂言に之を仕組めるもの無きは遺憾なり云々。

一、活動寫真と歴史教育

文學博士 西田直二郎君

歴史に物語風のもの道德的のもの科學的のもの三階級あるはベルンハイムの説くところなるも必ずしも此の順序に發展するものならず近時の史學の傾向はランブーヒトが史家は同時に詩人ならざる可らずと云へる如く事實の困苦しき記述の皮骨に血と肉との温かさ軟かさを與へて時代の精神を捉へんとするにあり殊に近代人の文化史に對する要求は時代の精神、思想の轉變を簡易に手取り早く知らんとするに在り茲に活動寫真と現代の歴史研究の趨勢の或る部分文化史教育の一面との接觸を可能ならしめたるものあるを見る現今世界に人氣あるは飛行機と活動寫真と也是れ其の迅速冒險不安の中に現代生活を表現する爲めにて單に映畫の面白き爲めのみに非ず

ルマン教授曰く近代の文化生活は廣き群集多くの階級民衆的氣分を學ばざる可らず而して現代文化生活を表現する機能は何よりも活動寫眞が最も多く具有す現代諸國家が此點に注意し殊に世界大戰後其の取扱ひに一時期を講したるも亦宜なりといふへし戰前は其の民衆に對する惡影響に付て主に氣遣はれたりしが戰後は其の利用殊に教育的方面に着目せられ國家自身之を獎勵するに至れり世界大戰に最も劇甚なる運命の轉變を経験せる獨逸壤地利を其の最さず獨逸は戰中國内の活動寫眞會社の多くが敵國に買收せられ自國に不利の宣傳に利用せられざるを氣付き之を驅逐して自國に有利の宣傳殊に兵士の訓練國民の士氣振作に利用せん爲め政府の手に收め多大の効果を奏せり戰後は政府の手より離れ政府の方針政策を宣傳するの契約を以て半官的のウーファ會社を設立せり大戰の痛手は自ら獨逸國民をして過去の光榮の追憶に耽らしめ種々の歴史的フィルムを作出せり何れも史家の充分なる研究に基けるものにして伊太利會社のクオ、ワデスクレオバトラの如きは成功を博したりも雖も其の眞面目な

る學術的基礎に至りては獨逸のそれと同日の談に非ず中にもルツター、フレデリツキ大王のフィルムは最も大なる喝采を博し殊に後者は帝政派の主義と共鳴し觀者の興奮極度に達し共和政府は之を警戒するに至りし位なり、埃國、露西亞、土耳其政府も亦其利用に注意を怠らず、米國にては盛んに流行するも淺薄の譏を免れず翻つて我國の活動寫眞を見るに其の眞面目の利用殊に歴史教育國民教化の點に殆んご顧られず文部省推獎の映畫も學術的價値なし近來學術紹介の目的を以て會社の創立を見るに至りしは注意すべきも果して獨逸に於けるが如き歴史教育の好映畫が出現し得るや否や疑問なり好き歴史フィルム之作成は經濟ミの問題たると共に亦歴史家責務の問題にして一に今後歴史研究の進歩發達如何に係れるものミ云ふべし云々。

一、日鮮離合の跡を顧みて

文學博士 三浦周行君

日鮮の同種は平安朝の初期迄我國民の一部に信せられしものにして彼我の神話が日鮮分離後に成れる古史に存

乍ら上古密接なる關係の存在を肯定すべきものを存する外漢字渡來以前の古語地名人名等にも同一若しくは類似のものあり其の他最近考古學上の研究による證明もあれど殊に民族制度を中心とする原始社會狀態の日鮮殆ど同一にして同時の支那と異なることは同種論に取りて最有力なる根據なるべし而して支那文化が先づ高麗より南遷して日本に傳はりしは地勢上當然といふべく文化移入の仲介者として日本にては朝鮮人及び支那系朝鮮人等の歸化民を最も歡迎優遇したりしなり、後日支間直接交通開くるに及びて必ずしも朝鮮經由を必要とせざるに至り同時に唐の勢力半島に入るに及びて我拋棄となり有形無形に日鮮は永く離るゝに至れり此の形勢の一變は各方面に波及せしが最も顯著なるは彼我の間攻守其地を異にせることにして爾來日本は常に守勢に立ちて新羅の侵入を恐れて中國九州の沿海に於ける防禦施設には國力を傾倒せしばかりなりき而も朝鮮よりの使節に對しては終始宗主國の態度を失はず彼牒狀の無禮を責めてこれを斥くるを傳統的政策とせりそれが又朝鮮の歸化民の心理に影響

して彼等をして其誇を捨てしめ同化を早むるに至れり然るに鎌倉室町に至りては攻守の形勢又一變し我國民は進んで半島に活躍し朝鮮は其防守に専らとなり豊太閤朝鮮出兵の後を承けたる徳川氏に至りては形勢復變轉し和親を切望せる結果對朝鮮政策は軟弱に陥り信使を厚遇するに過度に過ぎ新井白石は之を改めしも吉宗の時奮に復せり徳川氏の軟弱なる態度は延て明治政府に禍し爲めに拂ひ犠牲は莫大なりしが遂に我帝國の安全と東洋平和の保障を得んが爲めに日鮮併合を断行して多年の歴史的關係に最後の解決を與へたり日鮮の離反は朝鮮の支那化に依るも、之を歴史的經過に参照するに將來の同化の爲めに四個の教訓を得べし(一)國力の強大なる事(二)國民精神の旺盛なること(三)高級文化の保持者なる事(四)相互間に敬愛すること是なり日鮮の親密なる關係は英國と愛爾埃及印度の比にあらず朝鮮を以て第二の愛爾なりと云ふの不論なるは史家の證明し得べきところ、日鮮併合をして有終の美を濟さしむる爲めには史家も亦其實の一半を分たざる可らず云々。

當日の陳列品はこれを八門に分ち第一門朝鮮國書等には國王李岷及び李璋より將軍秀忠への書翰禮曹判書尹壽民より老中への書翰あり、第二門文祿慶長役に於ける朝鮮國王の教書には李岷の振武將軍吳連及び晋州牧使金時敏への教書あり、第三門清皇帝より朝鮮への勅書には清太宗より朝鮮國兵使林慶業への勅諭同高宗より朝鮮國王李岷妃金氏への誥封及び金氏の畫像あり、第四門文祿慶長役朝鮮將士の筆蹟には李元翼、李恒福、鄭琢、禹性傳、李完僧惟政等書狀、柳成龍の懲惡錄稿本同日記等、(寫眞)あり、第五門朝鮮人の日本紀行等には寛永元年寛延元年明治九年の回答使修信使の紀行、日本開見録其他の日本記事あり第六門近世日鮮交通史料には宗義方書狀長崎漂著民に關する報告、京都平信美對馬以酌庵無得の信使に贈れる詩及び新井白石の同書狀及詩上野景範、井上馨、竹添進一郎、花房義質の金宏業に贈れる書狀外部の意見書等あり、第七門朝鮮肖像畫、風俗畫等には李退溪、鄭道傳、金時習、李鳳祥の畫像、朝鮮風俗畫帖、京城繪圖、咸興繪圖、宮殿繪圖、大院君筆筒等あり、第八門朝鮮古文書日記の

様式一班には哲宗の咸鏡道觀察使任命教書、右議政壽恒家訓侍講院日記草、日省錄草、別給明文、放賣明文等ありたり。

●支那學會

例會 昨年九月卅日午後六時より文學部第六教室に於て開催左の講演あり、參會者四十五名、午後十時散會せり。

一、昭穆疑義

文學士 佐藤廣治君

世序の昭穆葬位、祔位、賜爵、合食の諸昭穆につきて解説し昭は明也、穆は順也の意義を論じ此の制の周代に起り長幼の序を定むるに起原するを謂ふ。

一奈良時代の抄本周易疏及經典釋文考

文學博士 狩野直喜君

奈良興福寺藏四種相違粉摹私記の紙背に存する講周易疏論家義記釋成第十三題する古寫本が六朝時代の南學派の易の諸注疏を取捨して纏めたるものの殘卷にして易を天道、人事、相因、相反、相須、相病の六門に分類し、沈居士、劉先生、朱仰之等の人名あるより見て陳の宣帝

の大建五年以後、隋以前の著籍に係るものなるを論證し以て經典釋文に及ぶ。

例會 十月廿八日午後六時より文學部第六教室にて開

催左の講演あり參會者三十八名午後九時散會せり。

一、支那語音韻研究法 文學士 高畑彦次郎君

韻鏡は方則的には不備なるものなるも實用的には極め

て秀逸せる書籍なりと前提し、内外合開の四轉、唇音齒

牙喉半舌半齒の七音、開發收閉の等韻、二百六韻の中の

七音に就きて詳論し、之が重唇音、輕唇音、舌頭音、舌

上音、牙音、齒頭音、細齒頭音、正齒音、細正齒音、喉

音、半舌音、半齒音、合計三十六音なることを論じ、

古音の還元法に方言を利用することと對譯に據ることと

の便利なるを指摘し、問題とせらるる喉音の影母曉母匣

母喻母半齒音の日母に就き影母は *msiŋh* の i 喻母は j

なるべく、日母は *ɛ* に置くべく、これが韻鏡の實用的に

誤無き所以なることを證明す。

一、義和拳匪亂 文學博士 矢野仁一君

此の亂の結果彼の變法自彊の詔勅の發布せられたるこ

とは支那歷代の祖宗の法制を一變せしものにして支那文化史上古今未曾有の重大事件なることを論ず。

大會 十二月三日午後一時より京都帝國大學々生集會

場階上にて開催聽講者一百餘名左の講演終了後午後六時

より階下南室に於て晚餐會開催せられ三十餘名の出席ありたり。

一、左傳に表れたる女性觀 文學士 本田成之君

叔向の母、夏姬、穆姜、魯桓公夫人文姜、桓公女哀姜

宋共伯姬、晉驪姬等の性行を指摘し、大體女子の人格が

認められず女子にも貞操の觀念絶無なりしことを謂ふ。

一、唐朝李氏の祖先について 文學士 井上以智爲君

新唐書宗室世系表にては顯以迄遡源しありて恩威の子

理徵、其の子が利貞にして利貞が本の子を食ひたるより

李姓の起りたることを謂ふと雖も、北史序傳、元和姓纂

冊府元龜帝系表、通志氏族略等に考へて清の揚丕復が論

ずる通り神唐書の宗室世系表には缺點あることを指摘し

六朝時代の名門の重んぜられたる狀勢より考へ之に對抗

せむ爲特に老子を祖先と定めたるならむと結論せり。

一、騷賦の生成を論ず 文學博士 鈴木虎雄君

左傳を見るに古腹際こはらの賦誦あり、工は箴諫を誦するあり、國語に瞽史之記あり、周禮に頌あり頌は絃なり誦せられたるものなるべし、管子牧民篇に國頌あり、皆三言を維ぐに則の字を以てす、春秋時代の國人の誦、輿人の誦亦皆四言なり、而して漢書藝文志には不歌而誦謂之賦とあり騷賦の特色は六字句なれば要するに騷は誦の遺風ならむと詳論す。

一、中世支那に移住せし西域人について

文學博士 桑原 隲藏君

後漢書張奐傳に舊制邊人不得内移とありて古く支那人は塞外民族の内地に入るを拒みしものなるも前漢西域との交通開けて後南北朝唐宋元と西域人の支那内地に移住する者も多く、張之洞、薩鎮冰、米振標の如き人々の祖先も外來人なるべし、即ち支那文化史研究上、此等外人の歸化は重要視すべきものなり唐代の子闐人の尉遲乙僧の繪畫、唐代司天臺を司りし印度出自の瞿曇 *Gotama* 家

迦葉 *Kasyapa* 家、矩摩羅 *Yama* 家三家、瞿曇悉多の開元占經、九執曆、迦葉志忠の進桑條歌表、弘法大師の師般若三藏の從兄弟羅好心、安國人李抱王、李抱眞、*Maymath* 人の歌者米嘉榮其の子米和の琵琶、回々且色の名人なる元の米里哈、唐の醫家米遂、宋の米芾、米友仁の書畫、蒲壽宥の心泉學詩稿、元の康里巎々の書高克恭の畫等隨分外來人にして支那文化史上に重要な地位を占むる者多きを指摘せられたり。

因に桑原博士の講演に關し左の史料の陳列もありたり
迦葉志忠の進桑條歌表、瞿曇悉達の開元占經、米芾の書史海岳名言、畫史視史、西域人蒲壽宥の心泉學詩稿、同薩都刺の雁門集、丁鶴年の丁孝子集、合魯人迺賢の河朔訪古記、西域人辛文房の唐才子傳、板勒紇人察罕の聖武親征錄、子闐人尉遲乙僧筆天皇像、米芾筆山水圖、米友仁筆山水圖、高克恭筆雲山小卷、清金天柱の清眞釋疑補輯、中華民國陳垣氏の元西域人華化考、光社章程等二十五點。

● 上代様假名陳列會

京都に於ける上代様研究會は昨年十一月十二日より十

九日に至る八日間、恩賜京都博物館に於て上代假名の特別展観を催したが、何れも門外不出の重寶珍什のみであつて、近來に類の少い催しであつた。その出陳品の主なるものを擧ぐれば、

●名古屋關戸守彦氏所藏小野道風筆纈色紙、●紀貫之年古今集高野切、京都里見忠三郎氏所藏●同卿筆家集切、名古屋關戸氏藏、●藤原行成筆古詩殘簡、京都本能寺藏●同卿筆寛弘二年四月十四日與書定文等案、京都福井貞一氏藏●同卿筆假名消息、京都熊谷直之氏藏●藤原公任筆朗詠切、吉澤博士所藏●同上、京都湯淺七左衛門氏所藏●堀川俊房筆萬葉集切、京都山田長左衛門氏所藏●藤原基俊筆多賀切、吉澤博士藏●同卿筆天治元年與書萬葉集卷第十三、京都福井氏藏●藤原俊成筆歌切、京都神田喜一郎氏藏●同卿筆千載集斷簡、京都毘沙門堂藏●西行筆内大臣歌合、京都杉浦三郎兵衛氏所藏●同筆卯花切、京都湯淺氏藏●同筆和歌斷簡千卷切、京都連水一孔氏所藏●杉浦氏所藏古筆手鑑●大阪野村徳七氏所藏手鑑

等であるが、此の外特に目を惹いたのは、本派本願寺所藏の正治二年十二月三日の裏書ある熊野懷紙一卷、近衛公時家の藤原道長筆神樂譜、冷泉伯爵家の敦忠集、大谷伯爵家の後奈良天皇より下賜された三十六人家集等の實に稀觀の逸品であつた。又毘沙門堂の藤原忠通の書狀及び後京極良經の書狀曼殊院の慈口の書狀等は單に筆蹟の上のみならず、史料としても注意されるべきものであつた。なほ十九日午後一時より會場内一室に於て出雲路通次郎氏の「上代假名に就て」を題する講演があつた。

●第十回京都大藏會

昨年十一月十六日午前九時より恩賜京都博物館に於て京都佛教各宗聯合會主催の下に第十回大藏會が舉行され十六日から二十日まで一般の觀覽に充てられた。第一門には支辨三藏に關する圖書を展覽したが、第一類畫像五點、第二類傳記八點、第三類大唐西城記等十七點、第四類成唯識論七點、第五類大般若經三十七點、第六類印度圖並須彌山圖二十二點、第七類十六番神四點、第八類雜部十點に上り、その主要なものとしては原富太郎氏の畫

像神田喜一郎氏の久安六年の奥書ある三國祖師影、延暦四年の西城記卷一（京都市興聖寺藏）、和銅五年の大般若經（滋賀縣太平寺藏）、五天竺國（東京寶松院藏）、十六番神（大阪松山與平氏藏）、玄辨三藏表啓（京都知恩院藏）等を挙げ得るであらう。

第二門には蓮如上人の御文を陳列したが、自筆の稿本十數點を初めとして、御文の編纂、書寫、印刷の窺はるべきものが各地の寺院又は個人之所藏より集められて六十點以上に上つた。十六日午後は同館内に於て、高雄義堅氏の開會の辭に次いで前田慧雲博士の大乗經典の成立に就いて松本文三郎博士の玄辨三藏に就いての講演が催された。【橋川正氏報】

●堺市史資料展覧會

堺市役所に於ては昨年二月市史編纂事業に着手したが約半歲の間に於て蒐集し得た資料の一部を同十一月七日より四日間同市開口神社内瑞祥閣及び市立第一幼稚園内遊戯場に陳列して一般の縦覽に供した。第一會場では史料蒐集謄寫成績の一斑、地圖類、社寺民政産業關係の軸

物器物類、皇室關係及び國寶、民政、産業及び運輸、中世以前及び外國資料並幕末對外關係、市民の祖先關係、堺板の古板本類、學藝及び教育の十に、第二會場では堺に關する著書論文新聞雜誌印刷物、風俗、御陵港灣河川災異、一般史資料中文書冊類、社、寺發掘物及び拓本社寺風俗港灣河川關係の軸物器物類、一般資料中屏風類の八に分ち出品點數千餘點に及んだが、今其内主なる物を紹介するに、元祿二年堺大繪圖は縱廿八尺横卅尺で道路の幅員は勿論各戸の氏名迄を詳記し其紙幅の彪大なるに記載の緻密なるに於て類似の地圖中稀有の逸品である。元龜二年の三好長慶畫像は繪畫としても優秀の作であり寛永十六年の澤庵自讚真相（國寶）も享保六年の白石贊谷紹殷畫像と共に畫像中の白眉である。大寺緣起國寶は繪は光起、詞は基熙以下當時の宮中に於ける能畫家を網羅し、紹陽利久宗久等の書狀、慶長三年の隆達小歌切等は數寄者の垂涎に値する物であるが文祿四年の利休履歷は資料として貴重なるものである。正平板論語以下天正板の節用集に至る迄堺の現存古板本類は殆ど全部蒐集さ

れ天文板論語の板本は之と並んで異彩を放ち何れも堺の古き文化の跡を語つて居た。文書類では開口神社の文治三年指判の寄進狀を最古として南北朝より足利時代に互る數々の賣券類は堺の市勢の研究上好資料であり延元元年の繪旨其他の住吉神社文書は同社と堺との關係を知る上に幾多の事實を教へる。觀應二年の念佛寺風爐料用寄進狀は大永五年の常樂寺風呂屋敷定禁制及び旭蓮社塩風呂由緒書と併せて昔時寺院の社會事業を見るべく日坂自筆已行記には永祿大正頃の堺の狀況を窺ひ得る。外國關係の物では南蠻繪屏風は足利時代に於ける堺港の貿易狀況を示すもの、摸寫ではあるが、原本の燒失した今日では無二の珍品として遇せらるべく永正十四年與書の繪入阿彌陀經からは堺の富商に關する史實を把み得られ同十六年の東惠長歌は春慶長慶宗諷等の連歌卷、宗祇の堺流連歌傳授卷と相並んで文學史上見遇すべからざるものなるに共に海外交通史上堺の位置を暗示するものであり西類子の渡航朱印狀は海外に活躍せし堺の貿易家の面影を偲ばせる。天正のミラノ及ゼニチア刊行日本布教年報

(句文) 元和のゼスイツト教宣教師報告書(同)モンタヌス日本遣使録(葡文)クラッセ日本西教史(佛文等)は外國人の眼に映じた昔の繁華な堺の寫眞に外ならぬ。維新史料としては妙國寺事件に關する横田辰五郎手記中のスケッチが殊に興味を惹いた。其他堺奉行時代の糸割符唐物問屋等語組合に關する數多の文書記録は土地柄に經濟史上有力な材料を提供し堺港に關する繪圖記錄亦同港灣の變遷を如實に寫鏡たらしめるに足るものがあつた。猶ほ八日午後同市府立堺高等女學校講堂に於て「堺港と歐洲人」(新村出博士)「歴史上の大堺」(三浦周行博士)の二講演があつた。【中村喜代三氏報】

會 報

○寄贈交換圖書

蓮如上人法語集

龍谷大學出版部

滿鮮地理歴史研究報告 第十

東京帝國大學文學部

東洋學報 一四の二

東洋協會學術調査部

朝鮮史講座 一二、一三、一四

東洋思想研究

中央史壇(大震災復興一周年紀念號)

國學院雜誌 三〇の九、一〇、一一

龍谷大學論叢 二五七、二五八

經濟論叢 一九の四、五

史學雜誌 三五の一〇

歷史地理 四四の五

人類雜誌 三九の七、八、九

考古學雜誌 一四の一四

觀想 十一月號

伊豫史談 三八

史學三の四

日本服飾史

會 員 動 靜

○入 會

東京市外板橋町字中丸四九九

(右紹介者 中江喬三氏)

朝鮮史學會

安岡正篤編

大森金五郎氏

國學院大學

龍谷大學論叢社

京大經濟學會

史 學 會

日本學術普及會

東京人類學會

考 古 學 會

觀想發行所

伊豫史談會

三田史學會

雄 山 閣

可 兒 虎 夫 氏

名古屋市第八高等學校

(右紹介者 今井貞臣氏)

京都市上區元誓願寺大宮東入

(右紹介者 新町徳之氏)

大阪市外天王寺村、阿部野高等女學校

戸 澤 佐 助 氏

(右紹介者 魚澄徳五郎氏)

奈良女子高等師範學校

小 島 貞 之 氏

(右紹介者 源豊宗氏)

東京市外戸塚町諏訪一一九、梅澤方 村田數之助氏

(右紹介者 可兒虎夫氏)

東京市外代々木山谷一六九、橋本方 近藤 貴 子氏

(右紹介者 大久保利謙氏)

東京市外中澁谷神山七六二、大塚方 吉田小五郎氏

(右紹介者 山口昌氏)

京都市黒谷山内上雲院

倉 石 武 四 郎 氏

(右紹介者 那波利貞氏)

大阪府三島郡春日村字倍賀

駒 井 毅 氏

京都帝國大學文學部史學科學生

間處武夫氏

（右紹介者 中村直勝氏）

同

岡本基氏

東京市外中野一五九六

十河佑真氏

同

河村久三郎氏

（右紹介者 小林秀雄氏）

同

白石捷一氏

神戸市永澤町一丁目一八七

森鹿三氏

同

荒川万壽夫氏

（右紹介者 水野清一氏）

同

井上五七氏

京都市下京區五條坂

小津清左衛門氏

同

岡本隆男氏

（右紹介者 三浦周行氏）

同

大館宗憲氏

東京市外高田雜司夕谷字龜原

須賀虎松氏

同

伊藤八郎氏

（右紹介者 羽田亨氏）

同

塩谷鴻氏

○退會

同

會我部靜雄氏

松本俊誠君 松田甲君

木村重治君

同

竹村越三氏

○死 亡

同

岡島誠太郎氏

塙忠雄君

同

水野清一氏

會費領收報告

京都市下京區今熊野南日吉町

與村伊九郎氏

大正十二年度

（右紹介者 島田貞彦氏）

京都市、第三高等學校官舎

森六郎氏

中岡清一 宮島貞亮 村川堅圓
鷺尾順敬 梶川榮吉 木村重治

京都市應天門通粟田口上ル、宮永方

三上友雄氏

兒玉九十 中原與茂九郎 淺賀辰次郎

移川子之藏 中島利一郎 三上左明 脇谷擣謙 青地重治郎 中江喬三
 中村勝麻呂 滋賀貞 松山直藏 中村榮孝(下半年) 村田治郎(下半年)
 神亮三郎

大正十三年度

久保田米登 石井東海夫 新城新藏 須甲理喜 加納川謙一 上田三平
 稻葉倉吉 西岡虎之助 淺見倫太郎 清岡猛虎 大橋徳四郎 小松倍一
 藤田精一 富田熊作 近重眞澄 中原與茂九郎 岡茂政 清水福市
 西村眞次 林森太郎 尾崎庄助 淺賀辰次郎 栗原助作 移川子之藏
 山本行範 上野一也 關信太郎 中島利一郎 黒田俊之亮 李能
 中岡清一 高橋欣二 藤岡繼平 大島五郎 上村治八 安藤正次
 近藤ひで 武内義雄 本庄榮次郎 三上左明 富森大梁 中村勝麻呂
 植木直一郎 吳文炳 三喜田熊藏 能勢丑三 坂本太郎(下半年) 野田貞雄
 磯野實恵 東洋文庫 高橋健自 新堂順明 圓谷弘 飯島嘉廣
 李範昇 宮島貞亮 村川堅固 山本道男 新町徳之 島崎良忠
 今井貫一 鷺尾順敬 大谷勝眞 滋賀貞 菊池謙二郎 荒木寅三郎
 古田良一 平山勘次 石原昌胤 中目覺 松山直藏 米田庄太郎
 梶川榮吉 三木一夫 木村重治 吉澤義則 藤井健次郎 藤代禎輔
 三井甲之助 増山重光 兒玉九十 藤井乙男 高瀬武次郎 鈴木虎雄

樽 亮三郎 桑原 隆藏 狩野直喜

石橋五郎 山鹿誠之助 源 豐 宗

三浦新七 高橋萬次郎 加藤鐵三郎

藤本了泰 前川英三郎 森 虎 夫

大正十四年度

大類 仲 西村真次 本庄榮治郎

村田治郎 近藤貴子 島崎良忠

戸澤佐助